

## 新しい決意とともに

動物応用科学科 4年 山田穂高

麻布大学に入学して4年がたち、残す行事も卒業式のみとなった。短かったような、長かったような学部生としての生活が終わろうとしている。私は卒業後も大学院に残るために同じような日々が続くだろうが、同期の友人達はほとんどが就職なりで麻布大学を離れていく。いざ目前に別れが迫ると、大きな節目を迎えているのだなとあらためて感じる。

私が大学生活で本気で取り組んだものは2つある。ひとつは空手で、もうひとつが研究だ。大学1、2年生の頃は空手中心の毎日だった。それまで武道はおろか、スポーツもそれほど行ってこなかったが、縁あって空手部に入り練習に明け暮れた。良い先輩たちや仲間を支えられて、厳しくも楽しい日々を過ごすことができた。

そんな私に転機が訪れたのは2年生後半の金華山実習だった。実験室の中でなく、自然のなかで生きている動植物を相手に研究するということが、とても魅力的に感じられた。3年生になった私は野生動物学研究室に入室した。もともと研究という仕事には興味があり、大学院進学も考えていた私はよくわからないなりに、頑張って勉強した。

金華山でのフィールドワークは非常にやりがいがあり、楽しかった。自然の中に飛び込んでいくと様々なことがわかった。というよ

りも、ほとんど何も知らないのだということがわかった。生えている植物の名前がわからない、歩いている昆虫がどんな生活をしているかもわからない。たくさんの疑問のなかで、ただもがいているような調査だったがそれが嫌とは思わなかった。途中で周囲との考えの違いに悩んだりしたこともあったが、いつでも研究は楽しかった。

けれど卒論の執筆にあたっては大変苦労した。努力はしたつもりだったがうまくいかず、焦るあまり何が大切で何をすべきなのかを見失うときもあった。自分の不勉強さや未熟さ、要領の悪さが露呈し、この2年間何をしてきたのだろうかと思ひひしがれることもあった。研究生活で初めて、つらさが楽しさを上回った。

そのせいか研究室での2年間を振り返ると反省や後悔ばかりが思い返されてしまう。それでもまだ研究が好きだという思いも、続けたいという気持ちもある。巡りめぐってまたスタート地点に立ったように感じるが、大きな節目を迎えている今、決意をあらたに新しい気持ちでいろいろなことに取り組んでいこうと思っている。